

## 百日咳68例の臨床的特徴と診断精度の検討

かとう かず ひろ ならい さかえ  
加 藤 和 宏 奈良井 榮<sup>2)</sup>  
かわ さき ゆう じ  
河 崎 雄 司<sup>1)</sup>

キーワード：百日咳，臨床像，LAMP 検査，診断精度，マクロライド耐性

### 要 旨

2025年には百日咳の全国的流行が報告された。本研究は、当院で診断した百日咳68例を後方視的に解析した。年齢は2~75歳（中央値12歳）で、学童期が約8割を占めた。全例に発作性咳嗽を認めたが、吸気性笛声19%、咳嗽後嘔吐40%と典型的三徴候を呈した例は少なく、咳嗽単独例が半数を占めた。発熱は16%に認められた。診断は主にLAMP検査で行われ、陽性率90.3%であった。発症14日以内では96.2%、15日以上では60.0%に低下した。ロジスティック回帰分析で「発症から診断までの日数」が感度低下の独立因子であることが示された。LAMP陰性例でも抗体検査により診断可能であったが、結果の解釈には注意を要した。マクロライド耐性株も2例で認められた。以上より、学童期を中心に非典型例が多く、発症早期のLAMP検査と適切な抗菌薬選択が診療および公衆衛生の両面で重要であると考えられた。

### はじめに

2025年には全国で百日咳の報告数が急増し、過去最多を記録した<sup>1)</sup>。当院の所在する安来地域においても同様の流行が認められ、多数の症例を経験した。

百日咳は感染力が極めて強く、乳幼児のみならず学童や成人にも発症する。学童ではワクチンに

よる獲得免疫の減弱、成人では非典型的な臨床像が背景となり、免疫を持たない乳児への感染源となることが問題視されている<sup>2-3)</sup>。このため、発症早期の適切な診断と治療介入が重要である。

近年は遺伝子検査が広く普及しており、特にLAMP検査は迅速かつ簡便であるが、その感度は発症からの経過日数や抗菌薬投与の影響を受ける可能性がある<sup>4-5)</sup>。また、抗体検査の有用性も報告されているが、特に抗百日咳菌IgM・IgA抗体の診断価値には限界があり<sup>6-7)</sup>、結果の解釈には慎重さが求められる。

本研究では、当院で経験した68例の百日咳症例

Kazuhiro KATO et al.

1) 安来第一病院 呼吸器内科

2) 同 小児科

連絡先：692-0011 安来市安来町899-1

安来第一病院 呼吸器内科